

ジュニアガイド

# Lucie Rie

Lucie Rie: Elegant Vessels Fusing East and West

2026.7.4 Sat. — 9.13 Sun.

主催 | 東京都庭園美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)、東京新聞

企画協力 | 国立工芸館 特別協力 | 井内コレクション、京都国立近代美術館

協賛 | DNP 大日本印刷

年間協賛 | 戸田建設株式会社、ブルームバーグ Bloomberg Van Cleef & Arpels

ルーシー・リー展  
— 東西をつなぐ優美のうつわ —



# ウィーンでの始まり

ルーシー・リーは、オーストリアのウィーンで生まれました。そこで活やくしていたのが、「ウィーン工房」というグループです。「ウィーン工房」を作った人たちは、毎日の生活で使う食器や家具を、すべて芸術品のように美しくしようと考えました。そして、手仕事でいねいに作ったかざりと、使いやすくて役に立つデザインをうまく組み合わせたのです。そうしたおしゃれな時代の雰囲気を感じながら、リーは器づくりを始めました。ろくろ（器づくりに使う回転する台）の上で、土が少しずつ器になっていく様子を見て、リーは感動したそうです。



グラスの形をデザインしたヨーゼフ・ホフマンは、「ウィーン工房」を作ったひとりです。

上野リチ・リックス（装飾）／ヨーゼフ・ホフマン（形）  
《リキュールグラス》1929年[1917年（形）／1929年（装飾）]  
京都国立近代美術館蔵



リーの先生、ミハエル・ボヴォルニーの作品。みんなで力をあわせてお皿を持ち上げています。

\*写真パネルによる展示です  
ミハエル・ボヴォルニー《跪く4人の童子付センターピース》  
1910年頃 岐阜県現代陶芸美術館蔵

リーがウィーンでつくった器。花のようなかたちをしています。

ルーシー・リー《鉢》1926年頃 個人蔵 撮影：野村知也



# ハンス・コパーとの出会い

第二次世界大戦が始まると、リーはウィーンを去り、イギリスのロンドンへと引っこしました。戦争がはげしくなると、リーはそれまでのように器をつくることができなくなります。そこで



ハンス・コパーが作った、矢印のかたち。今から5000年ほど前のギリシャで栄えた文化の名前がついています。

ハンス・コパー《キラデス・フォーム》  
1972年 国立工芸館蔵 撮影：アローアートワークス



リーは、生活のためにお金をかせようと、器と同じ素材の陶を使って、カラフルなボタンを作り始めました。

このボタンはとても人気になって、戦争が終わった後もたくさんの注文がきました。

そんなある日、ハンス・コパーという若者と出会います。ボタンづくりを手伝いにきたコパーは、器づくりを再開するようにリーをはげました。こうしてリーはふたたび、コパーといっしょに器づくりを始めます。二人はおたがいに助け合うすばらしいパートナーとなって、たくさんの作品を作りつづけました。



ルーシー・リーとハンス・コパーと一緒に作ったコーヒーセット。

ルーシー・リー／ハンス・コパー《コーヒーセット》  
1955年頃 滋賀県立陶芸の森 陶芸館蔵  
© Estate of the artists

ルーシー・リーが陶でつくったボタン。ひとつずつ手作りで出来ていて、たくさんの色があります。

ルーシー・リー《ボタン》（一部）1940-50年代  
公益財団法人岡田文化財団パラミタミュージアム蔵



# ルーシー・リーの器 うつわ ～技法と見どころ～ ぎ ほう

ルーシー・リーのうつわの見どころは、形、色、かざりがうまく組み合わせられ、上品でエレガントなデザインになっているところです。2つの作品を例にして、見てみましょう。



ルーシー・リー《マンガン釉線文鉢》1970年頃 国立工芸館蔵 撮影:アローアートワークス

ルーシー・リー《熔岩釉鉢》1980年頃 井内コレクション(国立工芸館寄託) 撮影:品野壘

## 形

器を支えている部分は細く長く、上にいくにつれてなめらかな曲線で広がっています。リーの作品ならではの、すっきりとして引きしまった軽やかな形です。

## 形

どっしりと力強く、平たく広がった器です。となりの器にくらべると、器を支える部分がとても短くなっています。手でそっと持ちたくするような温かみがある形です。

## 色

器を焼いて仕上げる前、ゆう薬やくという特別な液体えきたいを表面にぬることによって、いろいろな色や効果を作り出せます。リーはさまざまなやり方を研究して、この器には「マンガンゆう」を使っています。二酸化マンガンさんかを使うと、こんな茶色になるのです。

## 色

ピンクとグレーのあわく優しい色合いやさしいが印象的いんしょうてきです。ふたつの色はとけ合うようにまざって、うずまきのようにぐるぐると模様を作っています。これは色のちがう粘土ねんどをくみ合わせる「練りこみ」という技法です。

## かざり

この器には「かき落とし」という技法が使われています。器を針はりでひっかけ、表面をけずりとる技法です。そうやって作られたくぼみに、ちがう色をうめこむ技法を「象嵌ぞうがん」といいます。リーはあるとき、博物館で見た古いつぼに、骨ほねでつけられた引っかけ模様もようを見つけました。そこからこのかざりのつけ方を思いついたのです。

## 手ざわり

使われているのは、「よう岩ゆうがん」。マグマのようにブツブツしていることから、こう呼ばれます。ブラシでこのゆう薬を重ねてぬると、小さい穴あなができやすくなります。このザラザラした手ざわりは、リーのお気に入りでした。

# 「ルーシー・リー展 ―東西をつなぐ優美のうつわ―」ジュニアガイド

企画・発行 | 東京都庭園美術館 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

執筆・編集 | 勝田琴絵 (東京都庭園美術館学芸員)

デザイン・イラスト | 伊藤敦志 (AIRS)

© Tokyo Metropolitan Teien Art Museum (Tokyo Metropolitan Foundation for History and Culture), 2026



東京都  
庭園美術館

TOKYO METROPOLITAN  
TEIEN ART MUSEUM

